2012年度日本福祉文化学会国際現場セミナー報告

国際交流委員　マーレー寛子

2012年度日本福祉文化学会国際現場セミナーが2013年2月7日～9日に韓国端山市にて行われました。小規模な国際セミナーではありましたが、日本福祉文化学会として久しぶりの国際セミナーとなりました。一番ヶ瀬先生が大切にしてこられた学会活動の一つとして、近隣のアジア諸国との福祉文化の交流があります。その活動を絶やすことなく少しずつでも育んでいくことがいかに大切かをこのセミナーを通して感じることができました。韓国における様々な福祉の取り組みを見聞きし、そこでの人々とつながりを持ち、新たな視点や思いを持つことができたように思います。小さな一歩ではありますが、これを機会に少しずつ学会として活動を広げていくことができればと思います。

今回のセミナーが無事にそして有意義なものとなりましたのもひとえに韓瑞大学の趙 文基さんによる事前の準備からセミナー開催中の進行、通訳、案内全てにわたってお世話いただいたおかげです。先ずそのお働きに感謝したいと思います。そして、参加者の皆さん方もまた、それぞれに役割を持っていただきこのセミナーがよりよいものとなるために動いてくださったことにも感謝したいと思います。特に見学先への手土産を準備してくださった木村たき子さん、記録の写真を撮ってくださった藤原一秀さん、丁寧な記録をまとめてくださった岡村ヒロ子さん、研究者交流会で司会進行をしてくださった脇坂博史さん、準備段階で様々なご指示をくださった石田易司さん、そしてセミナー期間中色々なハプニングがあったにも関わらず笑顔で楽しい雰囲気を作り出してくださった皆さん、本当にありがとうございました。

以下、岡村ヒロ子さんがまとめてくださった報告書をお届けいたします。

2012 年度日本福祉文化学会国際現場セミナー

報告書「韓国の福祉文化を現場から学ぶ」

関西ブロック　岡村ヒロ子

【主催】日本福祉文化学会
【協力】韓瑞大学校　老人福祉学科、韓瑞老人療養園
【参加者】
関東ブロック；木村 たき子・阿蘇 道子・浮田 千枝子・中山 洋祐
関西ブロック；石田 易司・マーレー 寛子・岡村 ヒロ子・藤原 一秀・脇坂 博史
北陸ブロック；五十嵐 真一
国際会員；趙 文基
桃山学院大学聴講生；大林 輝子

【日　程】2012 年 2 月 7 日(木)～9 日(土)
≪１日目≫　2月7日(木) ①高齢者福祉施設見学
11：20・11：40　仁川空港着
14 ：00～　昼食
15：00～　端山市観光
17：00～18:00　韓瑞老人療養園見学
18：30～21:00　夕食
21：00～　韓瑞アカデミー泊
≪２日目≫　2月8日(金) ②端山市福祉施設見学
08：00～　朝食
10：00～　障碍者福祉施設(ソリム福祉園)
12：00～　昼食
13：30～　端山総合福祉館・端山障碍者福祉館
16：00～　韓国文化現場セミナー・研究者交流会
21: 00～　韓瑞アカデミー泊
≪３日目≫　2月9日(土)　③日本へ
08：00～　朝食
09：00～　自由観光(買い物)
13：20～　仁川空港へ

【研究発表】

	テーマ	発表者
①	「ベビーブーム世代の老齢期の社会参加と生涯教育プログラムモデルの開発」	カンヒョンジョン 韓瑞大学研究教員
②	「デイサービス利用者の自己決定と楽しさの関係」	マーレー寛子 社会福祉法人　小羊会 デイサービスセンターむべの里

③	「地域交流を通じた福祉活動」	藤原一秀 社会福祉法人　光朔会 障害者就労支援センター オリンピア岩屋
④	「美術治療プログラムについて」	ヤンチェ 韓瑞老人療養園 ソーシャルワーカー

1．韓瑞老人療養園見学

1）韓瑞老人療養園長 韓 勝恵氏の挨拶

「私にとっての『幸せ』は、いい気持ちになることです。こうして皆様とお会いできるのは、“生きている”からできるのです。今、私は幸せです。皆さんは幸せですか？福祉活動をする時、考えて活動することが重要です。また、文化を考えて活動できることは幸せです。こういった活動は誰もができるわけではありません。私は病院経営等で時間がないので学会活動をしたことがありません。でも後悔はしていません。それはこうして皆さんに会うことができたからです。私は60名のお年寄りを看ながら幸せ感をもつことできます。何がしてあげられるか、また、それができるということは“生きている”ということです。動けなかったらできません。

私が靭帯を痛めて3ヶ月間、お年寄りの顔を見ることができませんでした。久しぶりに会った時、涙ぐんでいるお年寄りに『私を待ってくれている、愛してくれている人がいる』そう実感し、私は幸せだと思いました。ここにいる限り、お年寄りのために何かをしてあげたいという気持ちでいっぱいです。

福祉の研究をしている皆さんに感謝し、発展することを祈っています」

2）施設の沿革

・2006年 社会福祉法人取得

・2010年 韓瑞大学漢方病院と医院の医療条約締結、老人療養施設開園

3）施設の概要

・規模；323坪（1～4階）　・入所定員；60名（2013．2.6現在58名、男14名、女性44名）

・費用負担；国：本人＝8：2、食事代は自己負担

・入所者平均年齢；84歳　・疾病現況；1位 中風　2位 認知症

・職員数；36名

4）主な事業

・相談・広報　・日常生活支援（四大介護）　・医療・看護・リハビリ（病院と合併している）

・ボランティアの育成（韓瑞大学と連携。歯に関する学科があるので学生が口腔ケアのボランティアに訪問。若者との接点づくりに心掛けている）

5）見学の後の質疑応答

Q．施設特有の臭いがしなかった。職員数も決して多くないようだが工夫していることは？

A．建築時、換気扇を導入した。ボランティアが充実している。

Q．ＴＶを設置していないが・・・。

A．園長の考えで意図的に置いていない。ＴＶを置くと会話が少なくなり、運動量も少なくなる。ＴＶを見たいなら部屋から外へ出ること。ボランティアが話し相手をしている。

Q．カーテンがないが、プライバシーは守られているのか？

A. プライバシーについては去年頃から考えるようになった。文化の違いだろうか、韓国の人は話をすることが好きなようだ。

Q. 事務長やソーシャルワーカーは若いがケアワーカーは若くないようだが・・・。

A. 療養保護士（ケアワーカー）の労働条件は厳しく（3D）、尊敬されない仕事で、若者には敬遠される。

Q. ボランティアが充実しているとのことだが、韓瑞大学以外のボランティアはいるのか?

A. 中学生・高校生、地域のボランティアについてはボランティア協議会からも派遣される。ボランティアの仕組みを作るのが我々の仕事だと思う。

2. 障碍者福祉施設(ソリム福祉院)見学

1) ソリム福祉院の語源；ソ：ソサンのソ、リム：林（はやし）⇒障碍者に優しいという意味（施設の前は桜並木、芝生の広場）、福祉院：カンベル院（ベルギーとの文化協定締結、姉妹都市、資金援助（オリンピック開催 1988 年まで）、建築物に多大な影響　例：中央に庭園を入れる等）

2）運営理念

・開放性　　・参加性　　・透明性

＊障碍者が奉仕を受けるだけでなく、入所している方や高齢者のところに出向いて可能なサポートを行っている。そのような実践は障碍者が社会的生産に参加することにつながる。また、親も安心して働くことができる。最終的には、グループホームで生活できるようになることを目指している。

3）利用料

・所得のある方；27～28 万ウォン

4）事業内容

①相談指導事業　②社会心理リハビリ事業　③教育リハビリ事業　**④医療**リハビリ事業

⑤短期保護事業；6 ヶ月、200 名利用

⑥職業リハビリ事業

・手袋（軍手）生産；生産過程：織造（日本の井関の織造機を導入）⇒オオバろく⇒包装
年間 130 万足生産

・卸先；まず役所が買い取り、企業に卸す。自動車整備業者・鉄鋼会社・火力発電所等々200 余個所

・賃金；最低賃金（約 30 万ウォンの収入）

・収益金から材料購入費を除き、毎月 10 日個人別通帳に積立する。職業的潜在意識開発と自立基盤形成、経済安定、最終的には社会統合を目的とする。

⑦ボランティア関連事業

・日本の障がい者施設ゆかり学院と姉妹提携を締結。毎年、優秀職員に日本海外研修の機会を与え、士気高揚を図っている。

5）質疑応答

Q. ゆかり学院とはどういうつながりか？

A. ライオンズの紹介である。

Q. 利用料は 27～28 万ウォンということだが基礎年金と賃金で払えるのか？

A. 基礎年金は 20 万ウォン支給される。賃金とで生活を賄うが不足する場合は生活保護を受ける。親が不足分を負担することもある。

Q. 軍手以外の職業リハビリ事業はないのか？

A. 海苔・クッキー・コーヒーショップ運営等々14ヶ所ある。
Q. 障がい者はどこで生活しているか？
A. 施設で生活している人が4%、地域で暮らす人が96%である。
Q. 障がい者法定雇用率は？
A. 今、はっきり分からない。障がい者全体では46%の人が就労している。

3. 端山総合福祉館見学

1) 挨拶

「端山総合福祉館は20年前開館しました。今、福祉は話題となっています。これからのテーマは『共生』です。『行政』から『民間主導』へと移行し、住民のために何ができるのかを考えていくのが我々の仕事だと思います。低所得層の自立能力向上、一般住民の余暇増進を図っています」

2) 施設の概要

総合的な社会福祉事業を通じて低所得層の自立能力向上と地域社会問題を予防し、市民の福祉増進を図る。

3) 歩み

1995年：開館
1999年：在宅福祉奉仕センター運営；配食・移動入浴←低所得層の選択
2005年：年寄り福祉会館開館；端山市運営、無料食堂、900人通所、アカデミック＆ＰＴ
2006年：週間保護センター（ショートステイ）及び物理治療室開設
2010年：週間保護センター廃止

4) 主な事業

①機能趣味教育運営；就業・創業実生活に適用可能な教育プログラム運営で庶民生活安定と福祉増進に寄与
・市からの予算　・対象：端山市に住民登録している市民（8000～25000ウォン）、国民基礎生活受給権者は無料　・プログラム：機能プログラム（コンピューター基礎・料理・洋裁等）趣味プログラム（書道・ヨガ・ダンススポーツ・ピアノ等）、資格証プログラム（調理士・壁貼り技能士・製菓技能士・製パン技能士・ＩＴ就業支援等）
・受講者：2230人/年　・講師数：45名

②児童福祉事業；学齢期（3～7 歳）発達障碍児童対象、オーダーメイド式教育（児童：教員＝60人：6人、個別授業3回/週、グループ授業1回/週、親教育2回/年）を通じて二次的な障碍を軽減。一般児童との統合教育能力向上。

③子供休みキャンプ運営；休み期間の子供たちの教養と趣味を習得する機会提供
・小学生対象　・プログラム：土で私だけの作品作り・リトルクッキング教室等

④高齢者福祉事業；急増する高齢者人口の多様な欲求を満たすことのできるプログラム
・対象：端山市居住65歳以上の高齢者　・プログラム：教養特講・健康体操・韓国伝統楽器演奏等　・奉仕隊運営

⑤地域福祉事業；幅広い福祉事業を通じて一緒に住む地域社会の実現
・ボランティア募集・管理（ボランティア教育1回/年）
・後援者発掘

⑥在宅福祉事業；貧しい家庭に在宅福祉サービスを提供することで社会的疎外感が解消され、元気で安定した生活が営めるように支援
・対象：よるべのない年寄り・障害者家庭・孤児家庭・低所得層家庭

・事業内容：事例管理、家事・衛生・情緒・行政・後援縁組サービス、ボランティア管理等々生活全般へのサービス

5）質疑応答

Q. 機能趣味教育運営の内容はかなり充実している。講師を揃えるのにどのような工夫をしているか。

A. 講師は公開募集している。サービスの向上を図るためには講師への報酬も上げている。受講生からの満足度は高い。

Q. 週間保護センターはなぜ廃止されたのか。

A. 人材確保の問題があり、市の方から廃止の通知があった。地域ニーズはあるので、今後は個人もしくは社会福祉協議体等の民間団体が運営できるような仕組みづくりをしていくことが大切である。

Q. 子供休みキャンプは障がい児も含まれるのか？

A. 健常児のみである。

Q. 児童福祉事業で学齢期3～7歳の発達障碍児童対象とあるが就学後のフォローはないのか？

A. 就学時は児童の状況について市の福祉課ならびに学校に報告し、就学後もその後の様子について連絡を取り合っている。

Q. 児童手当はあるか？

A. 子ども 3 人以上は教育費の 50%が割り引かれる。

Q. 日本には市独自で取り組む老人福祉センターというのがあるが、端山市は市直営なのか？

A. 市で予算化されている。配色サービスは 1 食 1500 ウォンだが利用者からもっと値上げしてもいいという申し出があるが予算で十分賄えている。

4. ソサン障碍者福祉館見学

1）韓国の障碍の概念

物理的・精神的障碍が長く、日常生活や社会生活で大きな制約を受ける者で政令で定める障碍の種類と条件に対応する文字を規定している。（連邦第 2 条）

現在 15 の障碍の種類があり、継続的に増加する傾向にある。障碍者の居住地は都市と農村地域に均等に分布している。

2）福祉館の姿勢

障碍者当事者の消費者としての姿勢をサポートする、障碍者と非障碍者と交流できる、世代が一緒に行うことができるさまざまなプログラムを強化したい。

3）施設の概要

・2001 年 4 月 10 日開業、10 月 12 日韓国身体障碍者協会支部に委託され運営

・広さ；1009 平方メートル（規制よりも広いが、忠清南道地域福祉館の 40%）

・スタッフ；4 チーム制（医療開発・社会開発等）18 人（69%の確保）

4）主なプログラム

・福祉事業、スポーツ・レジャー活動支援事業、職業リハビリ事業

5）施設ラウンデイン

・トレーニング室；18 歳以上の成年障碍者利用、運動処方に基づくリハビリ訓練

・職業リハビリテーション室；雇用前のトレーニング（貼紙等）と日常生活訓練（生活環境を整える）を通じて就職を準備、就労斡旋も行う

・言語療法室；障碍児対象、一対一で 30 分程度のトレーニング

・特別教室；障碍児対象、早期教育・学習指導を行い、ハングル・漢字等全般的な開発のトレーニング
・ホール；会議・卓球・ヨガ等多目的空間
・放課後の教室；発達障碍児の親の養育負担を軽減、忠清南道・社会福祉共同募金会の支援を受け、土曜日の児童保護事業も実施
・痛みの治療室；医師の処方に基づいて理学療法・バース治療を通して障碍者の運動機能の回復・向上を図る
・コンピューター教室；障碍者対象、エクセル・パワーポイント・ロータリーの活用法を養成

6）質疑応答

Q.視覚障碍・聴覚障碍者の実情は

A．実数としては少ない。視覚障碍・聴覚障碍者については端山総合福祉館対応となる。

５．韓国文化現場セミナー

会場；韓瑞老人療養園
司会；脇坂 博史

【研究発表と意見交換】

①「ベビーブーム世代の老齢期の社会参加と生涯教育プログラムモデルの開発」

韓瑞大学 研究教員；カンヒョンジョン

≪発表の概要≫

1. 研究紹介

韓国のベビーブーム世代の社会活動への参加の活性化を生涯教育の次元でアプローチを試みる。研究者は大学付設生涯教育に関心がある。

・研究の必要性；

＊諸外国のベビーブーム世代の実態；韓国（1955～1963 年：全体人口の 14.5%）
米国（1946～1964 年：全体人口の 30%）
日本（1946～1949 年：全体人口の 5%）

・ベビーブーム世代の問題；親の扶養・年金・社会参加・家族・雇用・住宅・健康
・法的支援策の不備；韓国:？　米国:高齢者保護法⇒経済活動の一定期間継続サポート
日本:高齢者雇用安定法⇒定年 65 歳延長
・社会参加支援策の不備；韓国：？
米国：The National Center for Creative Aging、Aging friendly
日本：老人クラブのプログラムを有効に

2. 現在進行段階

・ベビーブーム世代の社会活動の実態とニーズの把握；割り当て標本アンケート調査 1115 人
・ベビーブーム世代の社会活動の実態と老後のニーズ把握；
経済活動・ボランティア活動・余暇活動・教育（学習）活動
・外国のプログラムの事例調査；調査項目：老後の準備・老人教育・教育活動
1）カナダ；2012 年 8 月、バンクーバー、UBC 大学生涯教育プログラム
Community Center プログラム
2）日本；2013 年 3 月訪問予定の事前指導の時間

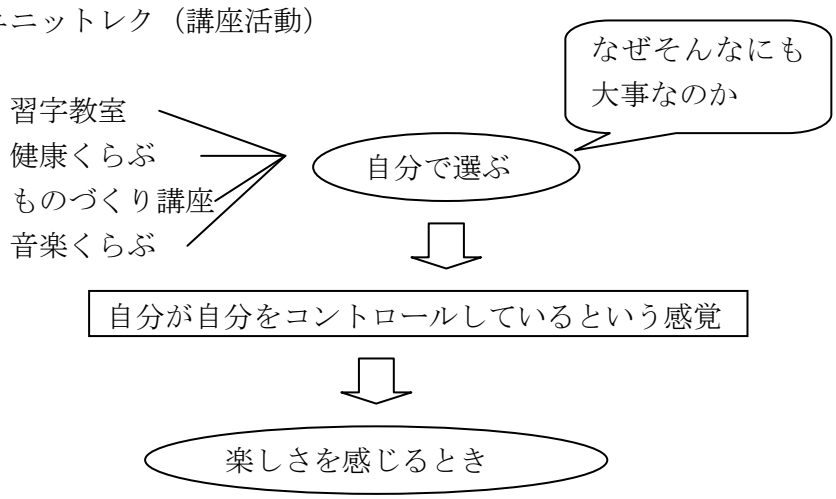
3. 質疑：日本の老後準備教育、老人教育実態

・老後準備教育；①運営するかどうか　②運営形態の例　③プログラムの例

・老人教育；①主に運営される形態（老人大学などの教育機関、村単位、福祉財団など）
②運営機関　③プログラムの例
・お勧め；①機関・プログラム　②本・論文　③研究者・大学

≪発表者からの依頼≫
・2013 年 3 月、日本の実態調査・研究のために訪問予定である。お勧めの機関・プログラム、本・論文、研究者・大学を教えていただきたい。
・発表者の依頼に対し、石田副会長からは大阪の老人大学、朝日・産経等新聞社の取り組み、研究論文、浮田会員からは立教大学の取り組み等、具体的な情報が提供された。

②「デイサービス利用者の自己決定と楽しさの関係」
社会福祉法人 小羊会 デイサービスセンター むべの里；マーレー寛子
≪発表の概要≫
・レクリエーションの定義；楽しみや喜びのための自由な活動、
楽しみや喜び、人間性の回復のための自由な時間
その活動や時間が個人にとって何なのかという心のあり方
・福祉レクリエーションの目的；楽しむことができる⇒健康
・福祉レクリエーションワーカー：エンターテイナー（人を楽しませる）だけでなく、本来の目的は「人が楽しむことができるようになるための援助をする人」
・ユニットレク講座活動の意味；高齢者にとってのレクリエーションの役割
学習性無力感（何にもできない）⇒ 自己決定 ⇒ 支配感（自分をコントロールしていること）・効力感（自分でもできるかもしれない）⇒ 楽しさ
・ユニットレク（講座活動）



・デイサービスセンター むべの里のレクリエーション風景をスライドショーでの紹介し解説が加えられた。

≪質疑応答≫
Q. 自己決定のレベルをどう考えているか
A．無動機、いやいややる、価値は分かっているからやっている、大事なことだからやっている、おもしろいからやっている、の 5 段階と捉えている。

③「地域交流を通じた福祉活動」

社会福祉法人 光朔会 障害者就労支援センター オリンピア岩屋;藤原一秀

≪発表の概要≫

・取り組み；オリンピア岩屋は障害者の「就労に向けてのステップ」「生活リズムを整える」等の目標に向けての活動として木工作業・丹波の“Olympia Farm”での農作業など、自然にふれる作業を取り入れ、幅広い体験を通して一人ひとりの「生きる力」を育んでいる。

・学んだこと、経験したこと；

ｉ．地方に移住してその地域のために活動する人がいること
→過疎にしない。森、農業、伝統、文化を守る・伝える・残す

ⅱ．都会から１時間も走ればフィールドはある

ⅲ．子どもから高齢者まで、いい経験の場になる

・農作業；丹波の“Olympia Farm”を定期的に訪問し、黒豆・小豆・玉ねぎ・ジャガイモ・米等を作る。種まき・剪定・定植・雑草取り・肥料入れ・収穫・選別・袋詰め・加工・土づくり・肥料づくりに取り組む。

・木工作業；兵庫県産の木材を使って様々なアイテム（バターナイフ・を制作。発達に障害をもつ子どもたちの知育教材や知的好奇心を刺激する木のおもちゃ（ビー玉コロコロ・)、ぬくもりを感じる木製プランター（東北・仙台との交流：プランタープロジェクト）等々。穴あけ・切断・彫刻・塗装・研磨・パッケージ等能力にあった仕事を担当する。

・コミュニティをつなぐ（施設のある神戸市灘区岩屋と“Olympia Farm”のある兵庫県丹波市氷上町）農耕・木工文化の実践をスライドショーで紹介し解説が加えられた。

④「美術治療プログラムについて」

韓瑞老人療養園 ソーシャルワーカー;ヤンチェ

≪発表の概要≫

・事前検査；うつ傾向で、受身・依存性が高く、精神面でのサポートが必要な方で美術治療が可能か否かをセラピストがＭＬＴで評価する。

＊風景（川・山・家・畑・石等々）を描いてもらうことで本人の意識と無意識を判断する。

・美術治療の過程；

①┌集団に自分を見せる：自己紹介の顔を描く、故郷を思い出し、描く（⇒本人のアイデンティティーが分かる）、野菜を描く（⇒ストレス解消）

②自分の考えを出す：痛いところを表現する、誕生日のお膳を粘土で作る（⇒消極的→積極的）自分自身の見たいものを描く、まんだらづくり

③嫌なことは避ける：回想したものを描く

④決断力をつける：人生に対する思い・現在の自分・思い出したこと・ストレス・希望等を表現する

＊上手に描く、作るということではなく、他者とくらべるものでもない。「よその人からみたら何点か」ということではない。

・美術治療で期待される効果；精神的に下降している人を高める

≪質疑応答≫

Q.ＭＬＴはどういう基準があるのか

A. ＭＬＴはセラピストがもつ評価表で高く出ると治療に適合、低いと不適合と判断する。
詳細はわからない。

6. 研究者交流会

日本福祉文化学会から石田副会長・マーレー国際交流委員長・木村総務・浮田会員・中川会員、韓国から張 世哲韓瑞大学校教授、各氏から感想が述べられた。張 世哲先生から今年、東京で開催される日本福祉文化学会全国大会に参加したいというメッセージをいただき、盛大な拍手が送られた。サプライズとして岡村会員から、今回のセミナーに企画者・通訳として尽力いただいた趙 文基氏、日韓交流の架け橋としてご協力いただいた韓瑞老人療養園のソーシャルワーカー、ヤンチェ氏にささやかな贈り物が渡され、労がねぎらわれた。また、ソサン障碍者福祉館の方から日本からの参加者に福祉館で制作した一つ一つ絵付けの異なる可愛らしいマグカップが贈ら、今後の日韓交流を約束して散会となった。

7.「国際交流セミナーを通して」

旧正月を迎える忙しい年の瀬に伺ったにも関わらず、すべての施設で暖かく迎えていただき、韓国の方々の「おもてなしの文化」に感動の連続だった。ニュースで韓国は例年になく厳しい寒さだと知り、覚悟はしていたものの“－14℃”という未経験の冷たさに皆、震えあがった。しかし、人間の適応力は相当なもので、熱々のスープと真っ赤なキムチ、体にいいといわれるさまざまな食材で芯から暖まるとその冷え込みがむしろ心地よく感じられた。恐る恐る口に運んだ牛の血の塊が忘れられない。血を食べれば貧血になりようがない。医食同源、そんな言葉がぴったりの食文化はまさに風土が育てたもの、実に理にかなっていた。

高齢者の入所施設（韓瑞老人療養園）、障碍者の入所施設（ソリム福祉園）、2つの利用施設（端山総合福祉館・端山障碍者福祉館）を見学し、共通して園長・館長の方の理念の高さと公の役割がしっかりしていることが伝わった。端山総合福祉館の方が「韓国も行政主導から民間主導へ移行する時代」とおっしゃっていたが、民間主導も一歩間違えると、福祉サービスが福祉でなくなり、営利主義が大手をふるう危険性を孕んでいる。

「福祉先進国の日本から学びたい、アドバイスをいただきたい」とおっしゃっていただいた。世界でも類のない速さで世界一の長寿国となった日本は福祉のファーストランナーである。やはり、注目されていることを痛感した。しかし、今の日本の福祉サービスに自信をもってアドバイスできることがあるだろうか。日本の現状を顧みる時、課題はあまりに多すぎる。

根本的に異なるのは、韓国には儒教の教え、キリストの教え（国民の三分の一がクリスチャン）が息づいていることだろうか。儒教やキリストの教えは敬う心、奉仕の心、与えることをいとわない心を説く、その精神が国民性として育まれている国では福祉は特別なことでもなんでもない。「ボランティアが充実しています」とさらりと言える土壌に、むしろ我々日本の方に学ぶ点が多いことを実感した。

韓国文化現場セミナーでは、韓国・日本からそれぞれ2題ずつの研究が発表された。いずれのテーマもこれからの福祉において鍵を握る研究内容だった。

韓国の1題目の報告、カンヒョンジョン氏による「ベビーブーム世代の老齢期の社会参加と生涯教育」については、日本でも高齢期を迎える団塊世代への啓発や場づくりにかなりの創意工夫がなされている。どの国においてもだんとつに多いベビーブーム世代が福祉サービスをふんだんに使っては社会保障費が逼迫してしまう。国としては健やかに人生を全うしてくれないと困る。一人の人間がいかに人生の質を保って高齢期を送るかは国の文化度の高さと比例する。

研究者は日本の高齢期の社会参加と生涯教育への取り組みを調査するために訪日予定だそうだ。日本の取り組みが参考になることを祈りたい。

韓国の2題目の報告はヤンチェ氏による「美術治療プログラムについて」だった。美術治療のセラピストがうつ傾向にある一人の利用者がテーマ別に描く20行程の絵や粘土の作品を分析し、治療することで精神面の高揚を図るというプログラムの紹介だった。一人の利用者に20行程というかなりの時間をかけ、精神面の改善を図るわけである。高齢者施設がそういったプログラムを取り入れている時間的・人的余裕は日本では考えられない。日本でも取り組んでいる施設があるのだろうか。

日本の1題目の報告、マーレー寛子氏による「デイサービス利用者の自己決定と楽しさの関係」については、日々、福祉施設で企画・運営されているレクリエーションをこのレベルに高めていく必要性を感じさせた。本当の「楽しさ」とは何かをきちんと理解して取り組んでいるだろうか、漫然とこなしていないだろうか。日本人はこれまで余暇活動に価値観をもたない国民性をもちあわせていた。遊びからどれだけのことを学び、豊かさを得るかなどにあまり重きを置かなかった。しかし、今は違う。これからは「人生の楽しさ」を熟知する高齢者が増えていく。レクリエーションを提供するものは、レクリエーションが単に楽しませるだけではないことや「自己決定」が単に二つのものから選択するだけではないこと、そういった言葉の意味合いを検証することが今こそ求められている時期と感じた。質問の回答にもあった自己決定を5段階のレベルで捉えることはレクリエーションを評価する上でたいへん有効だと思う。

今、日本人はたいへんな健康志向である。体にいいものを食べ、飲み、行動する。しかし、そこに「楽しみ」はあまり感じられない。「むしろ“健康を追い求める病”という笑えない現象がある。わが国は、まだまだ「楽しみ」観が成熟しているとはいえない。人生の質を豊かにする余暇活動を文化として根付かせていくのは「楽しみ」を知るものの役割だろう。

日本の2題目の報告は藤原一秀氏の「地域交流を通じた福祉活動」だった。精神障害児・者や認知症高齢者の方々が都会の施設から飛び出し、高齢化の進む地域へ出向き、休耕地での畑作業や、都会から移住した方が切り盛りする製材所で木工作業に励んでいる姿はとてもにこやかで自然だった。いつもは遅刻する精神障害者の方がここに行く日に限っては時間通りに来るという。人間正直なもの、嫌なことはやりたくない。意に沿わないことを無理無理やってストレスを抱え、うつになっている現代社会が逆に滑稽に映る。認知症高齢者もしかり、玉ねぎの収穫に最初は「そんなことはできないよ」と傍観していた方がいつの間にか仲間に加わっている、なんと手際のいいこと、それもそれプロだったという。皆が“イキイキ”とするケアとは、こういうことなのだろう。誰しも自然に抱かれて土をいじり、作物を育て、木のぬくもりにふれれば、本来の姿、やさしさ、おだやかさを取り戻す。一コマ一コマからその温かさが伝わってきた。この取り組みは単なる精神障害者や認知症高齢者ケアにとどまらず、過疎化が進みつつある地域の方々・地場産業と交流をもちながら、双方が活性化していることに大きな意義があると思った。